

第五十三回中央教化研究会議 基調講演

ポストコロナ時代における寺院のあり方を考える

井出悦郎

司会 基調講演の講演者のプロフィールを、改めてご紹介させていただきます。本日基調講演を賜りますのは、井出悦郎先生でございます。井出先生は、東京大学文学部中国思想文化学科卒業、東京三菱銀行等を経て、経営コンサルタントディングのICMG社では、上場企業の経営改革、ビジョン策定と浸透、グローバル経営人材育成等、ヒトづくりを切り口に、経営中枢への長期支援に携わり、仏教との出会いを機縁にいたしまして、平成二十四年には一般社団法人お寺の未来を創業されました。現在では、「一人ひとりが良きお寺と出会うご縁を育み、新たな安心に満ちた日々の歩みを支えます」との使命のもとに、一般社団法人お寺の未来、また一般社団法人お寺の未来総合研究所の代表理事をお務めでいらっしやいます。

本日の講演は「ポストコロナ時代における寺院のあり方を考える」と題しまして、基調講演をいただきます。それでは、井出先生、どうぞよろしく願っています。

井出 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介に預かりました、お寺の未来の井出悦郎と申します。本日は、どうぞよろしく願っています。午前中に、三原先生からもご紹介いただきましたが、二〇一六年に清澄寺で行われた千葉

教区の研修会で、三原先生とお会いしました。その後もご縁をいただき、本日このような場にお呼びいただいたという次第です。

私自身、過疎地を特段研究しているわけではありませんが、全国のいろいろな寺院の経営支援に携わっている中で、過疎地の寺院は当然幾つかございます。主にはそのような寺院との関わりの中から、過疎地寺院が今後生き残っていくために必要なこと、また都市部寺院とは違う可能性として必要なこと、という観点で進めさせていただければと思っています。

先ほど、中條先生の素晴らしい調査報告を拝聴していましたが、過疎地の厳しい現状と、これから私がお話しする内容が合っているかどうかというのは、甚だ疑問なところがありますが、私なりに感じていることをお話しさせていただきます。ただだけばと思っています。

プロフィールについてはご紹介いただきましたので割愛しますが、少し簡単にガイダンスをさせていただきます。私自身、全国のいろいろなお寺と関わりを持たせていただいております。最初、今の仕事を始めたときにとっても困ったことが、良いお寺の定義というものがよく分からないということです。世の中に、どこにもそういった視点や指標みたいなものがなく、手探りの状況の中で始まりました。その後、年々いろいろなデータが手元にたまっていき、また自分自身が実際に全国のさまざまなお寺にお伺いさせていただく中で、生活者や世の中視点で見たときに求められる、良いお寺の要素を、「安心のお寺十ヶ条」という形でまとめられています。十ヶ条をそれぞれ、さらに細かく分類をし、全部で約百十個の細かい項目に分類をしています。これは、私から仏教界への恩返しの意味を込めて、web上で無料診断を受けることができます。すべて無償で公開させていただいているので、もしご興味があれば、ぜひアクセスしていただければと思います。スコアによって、実際にご自身のお寺の特徴、良いところや課題が、リーダーチャートによって可視化されるというものです。

現在、日蓮宗寺院は、全国で三十寺院ぐらいにご回答いただいています。先日、その回答内容を見てみましたが、日蓮宗寺院は自信のある方が多いのか、スコアが比較的高めに出ている特徴があります。日蓮法華系寺院の全体的な印象です。

先ほどご紹介にもありました通り、世の中からお寺を見たとき、なかなか全体像が見えない。特にお寺とご縁がない方は、どのようにお寺を選んでいいのかよく分からないということがあります。そこで、お布施の問題等も含めて安心しておつき合いただける寺院を、「まいてら」というポータルサイトで、広くご紹介をさせていただいています。実際、この「まいてら」を通じて、日々いろいろご縁が生まれています。

withコロナというキーワードがありました。コロナ禍になってからというもの、私も皆さまもいろいろと考えることがあったと思います。先日、内閣府が最新の社会状況を調査しました。その結果をもとに、簡単にお話しさせていただきます。

まず、首都圏の住民基本台帳に基づく人口移動に関して、去年までは、若年層を中心に首都圏に一極集中をしていました。特に、進学や就職のときに、首都圏に大きな人口が流入しています。約十数万人が首都圏への流入超という状況が続いていました。この状況がまだ続くのではないかとというところで、新型コロナウイルスの感染拡大という大きな出来事が発生しました。直近においては、二〇二〇年七月に首都圏が、近年で初めて転出超になったことが話題になっています。東京都は五月も転出超でしたが、首都圏全体として転出超になったのは、二〇二〇年七月であります。しかし、千葉県などの近郊県では流入超になるなど、首都圏の中でも人口移動が起きているところもあります。実際に、私の友人も千葉県に移住しました。このように、少しずつ首都圏一極集中という一方向の価値観とは、別の動きが出始めているのではないかと感じています。

同様に内閣府が行った調査において、約三十五%の就業者がテレワークを経験しています。実際、現在のラッシュユ

時の電車に乗っていても、あくまでも体感値ですが、路線によっては従来と比べて約半分の乗車率です。明らかに朝の風景が変わってきていることを実感します。一度でもテレワークを経験した方は、今後もオフィスへの通勤ではなく、テレワークの継続を希望されています。

就業状況の変化の中で、家で過ごすことが増え、仕事よりも生活を重視するという傾向が高まっています。つまり、家族の重要性を意識する人が増えているということです。コロナ禍で離婚件数が増えた、ということも言われていますが、多くの人は家族が重要であるということを再認識した状況にあります。そして、これはお寺にとってグッドニュースであると思います。

そして、結婚に対する関心も高まっています。特に、東京二十三区に在住の若い方、特に二十歳代の地方移住への関心が高まっている。まだ世帯をもっていない方も多く、身軽ということもあると思いますが、意識が少しずつ変化してきています。実際に行動に移る前には、意識の変化があります。意識が変化し、ある段階で行動も変化をしていきます。現在、意識という点では、コロナ前と比べれば、確実に変化していると言えます。

転職会社が行った調査では、U・イターンによる地方での転職を希望するかというものです。コロナ禍直前の二月と比べると、二十代の地方への転職希望者は増加しています。特に、テレワークを経験された方は、WLB（ワーク・ライフ・バランス）や地方移住の関心が高まっています。いままではオフィスに通えばよかった、通わなければいけなかったと思っていた働き方が、意外と通わなくても働くことは出来るということが分かってきました。本日の講演も同様だと思いますが、いままでであれば池上にお伺いしていたものが、自宅の自分の部屋から参加させていただけいておられます。このように、仏教界でも劇的に変化があることなので、世の中の変化により敏感な勤労者においては、価値観の変化が著しく生じていることが推察されます。

一方、お寺が主に付き合うシニア層はどうなのか。コロナ禍において、当然他者との交流機会が減少し、家に閉じ

こもりがちな人が多くなってきました。その中で、オンラインを積極的に利用していく方は6割以上いますが、利用したいと思わない方も3割強おり、はっきりと別れています。そのため、オンラインに適応していく檀家さんいらいらすれば、そうではない方もいらっしゃることをお寺としては認識して、当然両方の対応やケアが必要になってきています。これは、どちらが良い、悪いということではなく、両面の対応が必要であると思います。しばらくコロナ禍は続いていくと思いますが、高齢の方は、時間とともに当然お亡くなりになります。時代は間違いなく、オンラインの時代に変化していくと思います。

「パラダイム・シフト」という言葉があります。パラダイム・シフトの一番の要因は何か、それは人が死ぬことです。新しい技術の登場など、確かにさまざまな要因はありますが、古い価値観を持つ人々がお亡くなりになられていくことこそが、最大のパラダイム・シフトの要因であると言われています。まさに今、日本はその過渡期に差し掛かっていると思います。お寺もその岐路にある中で、さまざまな対応が難しくなっていると感じています。

近年のキーワードとして、「開疎化」があります。これまで都市にずっと人口が集中してきましたが、現在の価値観は、先ほどのデータでも見た通り、逆ベクトルの力が大きく働き始めています。開疎空間は、過疎地はその特徴が多く当てはまるようなところがあります。自然が多いこと、特に密になることは、基本的にはあまりないので、潜在的に開疎空間の価値が高まっています。

しかし一方で閉じていく部分もあり、他人の生活空間に入り込んでいくことのハードルがとても上がっています。逆に言えば、他者を家に入れること自体が、以前と比べてハードルが高くなっています。この点について今回のお盆の棚経とかを見ていると、お寺というのは特異な存在であると思います。お寺と檀家さんの間に、そこはかたない信頼感が、長年にわたって蓄積されているということが影響していると思います。当然、その中でもさまざまな理由で棚経を断る檀家さんはいらっしゃいますが、僧侶が他者の生活空間の中へ入っていくことができているということ。

この立ち位置は、極めて特殊なことであるので、コロナの時代において、その立ち位置をどのように生かしていくのか、がかなり大きなポイントであると感じます。

レジュメにもある通り、コロナによって六つの志向性が高まるといわれています。まず、何よりも、命の安全・安心です。また、変わらないよりどこを求めていきます。そして当然、財布のひもは締まります。このコロナ禍において、世の中の人々は、自身の人生において本当に大切なものとは何かということを考える時間がたくさんありました。これは、お寺でいえばお骨の整理など、そういった作業をされた方は多くいらつしゃると思います。実際、コロナ禍に入ってから、「まいてら」の方に「お骨を預かってくれませんか」という問い合わせが、お寺ではないのにとっても増えました。この現象は、長年なかなか踏み切れなかったものを、この間にちゃんと整理整頓していくことに踏み出される方が、一気に増えたことの現れであると感じます。また、家での滞在時間が増えるので、イエナカでの充実志向が高まります。そして先ほども申し上げたとおり、家族志向も同時に高まります。さらには、社会のためという、社会協調志向が高まっています。

接触から非接触については、リアルに会うこと自体の意味合いや重要性が、格段に上がる時代になると思います。私も、日々いろいろな予定が入っていますが、「それって、わざわざ会わないとだめですかね？」と感ずることが結構あります。わざわざ会いに行くこととの価値が極めて上がっていくことです。逆に、会うということは、それだけあなたとの関係が大切であるということの表明となります。つまり、必ずしもリアルに会うということを前提としない社会になっていくということです。家庭空間が閉まり、他者が入りづらくなるという点に関しては、先ほど、お寺がとて特異な存在であるということを申し上げました。また、キャッシュレス化も進展していくと思います。今行われた施餓鬼会や棚経のお布施にしても、振り込みを受け入れているお寺は、私のおつき合っているお寺の中でも増えています。お寺は面授、面と向かっているいろいろな法を伝えていくという、基本的な営みを軸としてい

ますが、その基本が大きく揺るがされているということになります。しかし、コロナ時代はそんな簡単に収束しないと思います。私は、以前、製薬業界関係の仕事をしておりましたが、薬はそう簡単に世の中に流通しません。ロシア、中国が早期に承認したなどと、いろいろ報道されております。確かにビッグデータとAIによって薬の開発期間の短縮は進んではいますが、そう簡単に進むことではないため、安定したワクチンが開発されるのは、恐らく相当時間がかかるはずでです。コロナが収束したとしても、そこから経済の回復が進んでいくので、この影響は相当続くと思います。

先ほども申し上げた通り、「家族」の重要性は再認識されました。一緒に暮らしている家族の重要性は高まったわけですが、先祖に対してどうなるかということについては、未知数であると思います。ただ、私がいろいろとお手伝いさせていただいているお寺さんでは、今回の施餓鬼会やお盆の塔婆はほとんどが増えました。コロナによって塔婆は減ると思いましたが、逆にかなり増えたため、お盆の法要で他のお坊さんと呼ぶことができない中、お盆と施餓鬼会の法要は黒字化し、予想外の展開であったとおっしゃる方が多くいました。コロナ禍のいまだからこそ、少なくとも「先祖にちゃんと塔婆くらい建てようよ」という意識が働いたと思います。これが継続的な意識として続いているのかということは、未知数であると思います。ここは、お寺自身もいろいろ努力をしていかななくてはならないであろうと感じています。

先ほども申し上げた通り、開疎空間の価値が高まっていくということになります。しかし、開疎化の力は働くものの、地方が簡単に人口増になることは、そう単純なことではないと思っています。過疎化が進展した根本の原因は、過疎地域が人をつなぎ止める求心力を失ったからです。それは何十年にもわたって蓄積されてきているものであり、その間、都市の魅力に抗うことができなかったわけです。その中で過疎地域が、今の時代の変化に合わせた何らかの魅力を提供していかないと過疎の解消は難しいです。また、そこに寺院が位置しているのであれば、その地域の社会

課題に取り組んでいくような積極性がない限りは、持続はなかなか難しいと感じています。

私がいろいろなお寺とお付き合いする中で感じていることを、幾つか挙げてみました。大きく分けて六つあります。自然の多様性の再生と共生。これは、循環型社会というキーワードで置き換えてもいいと思います。あとは、地域の歴史的物語性の保全や、そこできちかわえない文化体験の提供、未来への投資、移住者と地域の縁つなぎ、看取り・お骨の安心感、この六つが思いついたところです。一つ一つについてお話をしていきたいと思います。

まず、お寺と農業のつながりというものに、かなり可能性があると感じています。ちょうど現在、具体的に長期視点で一緒に動いているお寺さんがあります。実際に、昔のように、お寺が農地を持てるわけではないのですが、いろいろと試しながら動いている中で感じることは、やはりお寺には地域からのそこはかたない安心感があるのか、「農地を借りたい」と言うと、意外と「オッケー」と言ってもらえる地域や檀家さんがとても多いです。あるお寺さんでは、その地域にたまたま大学があるため、農業やお寺に関わることに興味を持たれている大学生を巻き込みながら、農業のビジネス化のようなことに取り組んでみようかという話があります。お寺の信用というのは、とてつもないものがあると感じており、農地を集約していく点においても、単純に一人の人間が行くよりも、お寺というものが信用補完に関わる可能性が大きいと思います。

実際に臨済宗のお寺さんで、兼業で桃農家をされていらっしゃる方がいます。この方は、全然違う地域から来て、住職を任された方です。お寺の周りには桃の木がたくさん植わっており、荒廃しかかっていたところを、お寺の住職だけでは食べていけなかったため、桃の栽培に取り組み始めたら、意外と地域の方や檀家さんが助けてくれたそうです。この写真に写っているのは、お寺の周りに咲いている桃の花で、前の住職さんが撮った写真とのことです。もう一度、お寺の周りが桃の花で覆われるような、風景を取り戻したいということで、現在、頑張っているらしいです。その桃の花見を、地域のお祭りにする目標を掲げていらっしゃるったり、檀家さんを越えて、すでに地域とご縁が広

がっていたり、また、檀家さんの力を使って、農協に縛られない販路、商流を開拓されていらっしやいます。そして、住職が実際に耕していることから、「うちも耕してくんないか」という話がかなり寄せられているそうです。

次は別のお寺ですが、先ほどのお寺と同様に、このお寺においても、お寺に土地を任せるといって、その安心感や信頼感みたいなものがあるということです。実際に、お寺が宗教法人として農地を所有することはできませんが、農地集約をしていくときの信頼補完にはなると思っております。農業法人を仮に設立した際に、そこへ住職が入ることによって、そこはかとお寺の信用が生かされていくという構図は、かなり現実的にありえると思っております。

次は北海道のお寺です。門徒さん、檀家さんを巻き込みながら、電力事業を始めたというお寺さんです。実際に北海道電力にも売電をして上がってくる収益を、寺院活動に活用して、少しでも檀家さんの負担を軽減していくということを目指していらっしやいます。

次は、ご存じの方が多いと思うのですが、里山をお墓に変えたという岩手県の樹木葬です。最近ではあまり、ここまでの本気の樹木葬は出てきておらず、なんちゃって樹木葬がほとんどだと思います。しかし、本当に自然との共生や循環を考えたとき、里山を生かした樹木葬の可能性は大いにあると感じます。

個人的に思うこととして、地球環境が激変する中で、全日本仏教界や各宗派も同様に、この数年SDGsを叫び始めていますが、私は残念ながらその動きに対して比較的冷めています。「仏教には元々その考え方があった」などの主張は、本地垂迹をはじめとした歴史的に仏教界が行ってきたマウンテイングと似ているように感じます。根本的に自分たちの思想の中に眠る自然との関わりや共生という、思想の生命エネルギーの位相からの引き出しが大切です。そして、思想だけではなく、自分たちにはこういった即応する取り組みがあるのだ、という具体的行動も含めて提示できていない、単なるファッションとしてのSDGsになっています。本気で自然と共生して、本気で法を説いていくことがない限り、なかなか難しい取り組みではないかと思えます。禅宗や真言宗などは自然との共生が分かりやすいの

ですが、日蓮宗の場合、自然に対する思想がどうなのかというのは私はよく分かりません。しかし、もし可能性があるのであれば、こういうところを追求されることも、大切なことではないかと思えます。

二点目として、地域の歴史的物語性の保全です。最近、注目を浴びているマイクロリズムです。遠くに行くのではなくて、近場で地域の魅力を発見していく旅行をしましょうということです。現在の日本の旅行市場は、四・八兆円のインバウンドと、一・二兆円の海外旅行の約六兆円がすっかりなくなった状態です。二十二兆円の国内市場も収縮している中で、遠くよりも近くの魅力を発見しようというマイクロリズムというのが、いま着目を浴びています。地域内観光、地元の魅力を再発見し、地域の人々とのつながりを感じるということなのですが、マイクロリズムだけに限らず、旅行者などの関係人口という観点からも、お寺はとて可能性があると思っています。お寺は、地域と絡む物語の宝庫であると思えますし、それを分かりやすく伝える形で発信をしていくことが、とても大切だと思います。実際、私自身が全国に旅行に行くとき、近くに知り合いの住職さんがいらつしゃれば、旅行のガイドブックとかには載っていない情報を、いろいろと教えてもらいます。かつ、知らぬ間に住職さんがお店も予約してくれるなど、普通では味わえない旅行ができます。やはり、住職の地域における存在はすごいなと感じています。このように、住職やお寺が持っている、無形のネットワークを提供してあげるということも、かなり大きな可能性があると思えます。

元々日本は神仏習合であり、私もどちらかといえば、そのような価値観を持っているのですが、自宗派に閉じた動きという時代は終わっていると思っています。縮小していくのに対して、自分の殻に閉じこもっているということに、未来はないと思っています。また、仏教界に関わるようになってから感じたのは、思想的摩擦がないことです。摩擦のない思想というのは、基本的に生命エネルギーを失っているのに等しいので、どんどん摩擦を起こしていかない限り、未来はないと思います。これは、仏教界全体にいえることだと思っています。神社や他宗派のお寺など、色々な

ものに関わっていく中で、地域の縁をさらに張り巡らされて、地域の物語性の一プレイヤーになっていくということが、とても大事ではないかと思えます。

三点目は、そこでしか味わえない文化体験。これは、お寺的にいえば仏教体験ということになると思いますが、一般から見れば文化体験の提供ということになります。この数年、仏教体験コンテンツに取り組むお寺は、どんどんと増えていると感じます。恐らく、それは日蓮宗でも同じだと思います。

これは鳥取県にある浄土真宗の光澤寺さんで、一日一組限定の宿泊をコンセプトにした宿坊の先駆的存在です。こちらの住職は、本気で取り組まれていらっしやいます。住職を継いだときは、かなり厳しい状況だったようですが、今や全国的に名前が知られるようになってきております。宿坊から始め、いまや納骨堂や墓地にも事業が展開しています。供養ではない分野から始まり、供養の方にも可能性が出てきて、お寺の持続的可能性を高めています。

続いてこちらは、青森県の下北半島の突端、マグロで有名な大間市にある曹洞宗のお寺さんがやっぴらっしゃる宿坊です。これも、先ほどの光澤寺さんに刺激を受けて始められました。まだ三十歳ぐらいの若き住職ですが、とてもアクティブで、色々な地域の縁をがながん広げながら活動されています。こちらの宿坊も、今後どんどん伸びてくるとは思いません。実際、樹木葬なども始められまして、地域を越えた縁が進んでくるとは思いません。基本的には、檀家さんを中心とした供養関係の収入というのは、減少の一途をたどっていくわけですが、特にこのような宿坊や、その他の収入源を確保しようとした場合、その宗派らしさを生かした体験コンテンツを、充実にしていく必要があるのではないかなと思います。

この表コロナが始まるずっと前から、私自身が数年間いろいろなところで掲げ続けてきている内容です。お寺の立ち位置とは、資本主義で営まれている世界の動きと、ある種逆張りの立ち位置であるということです。時間、空間、合理性、自然観、人間観、何を取っても逆の立ち位置にある。だからこそ、バランス機能として社会の中で存在感

資本主義とお寺の特性比較



| | 資本主義の特性 | | お寺の特性 |
|-----|---|---|--|
| 時間 | より速く (音速・光速への挑戦) | ⇔ | ゆっくり、ゆったり (世代を超えてご縁を大切に) (まあまあ、そんな急がず。ちよつとお茶でも) |
| 空間 | より遠く (地理的フロンティアの解消) | ⇔ | 地域に恋して一千年 (今までもこれからも、地域と運命共同体) |
| 合理性 | より多く (最少インプットで最大成果) | ⇔ | 効率よりも非効率 (巡り巡ってどこかで返ってくる(かも)) (損得勘定を抜きに、相手に奉仕) |
| 自然観 | コントロール可能 (人間は万能。自然は改変の対象) | ⇔ | 諸行無常 (大自然は全てが移りゆく。人間もその一部) |
| 人間観 | 機械化・自動化・モジュール化 (あらゆるものをデジタルに) | ⇔ | アナログ万歳 (お互い様の関係。網の目のご縁を大切に) |

Copyright お寺の未来 All Rights Reserved.

40

があり、世の中がどちらかに傾いたら、中庸的なところに戻していく。そのような役割を果たす存在であると思います。特にコロナになってから、お寺が培い、保全してきた特性というものは、まさに最適ではないかと思っております。それをどう生かしていくかは結局、個々のやる気と才覚が問われていくこととなりますが、お寺の可能性はさらに高まっているのではないかと思っております。

現在、インバウンドはかなり減っていますが、またいつかは数字が戻ると思います。コロナ前は東アジアの仏教文化圏から多数の訪日観光客がいらつしゃった。今後は、ヨーロッパやアメリカからの訪日観光客を増やしていくことが、国の政策として動いていくわけですが、近辺の国から人が来るといふ状況は、変わらないと思います。

三年前のことですが、上海に中国人の知り合いがいて、その人は中国で寺院ツアーみたいなものを企画している方でした。中国は廃仏毀釈の影響などもあり、なかなか寺院がまともな形で残っておらず、一部の大寺院に数万人が集中してしまう状況が起きています。そういう中で、癒されたいのに寺院へ行ってもなかなか癒されないという状況が

どうやらあるしく、日本のお寺であれば、少しはゆっくりできるのではないかとということで、先ほどご紹介した鳥取県の光澤寺さんに連れていきました。日本の田舎に行けばどこにでもあるような風景が、光澤寺さんの周りにも広がっています。上海から来た女性二人は、日本の田舎の風景をずっと写真でパシャパシャと撮っているのです。何に惹かれていいのか、私にはよく分からなかったのですが、いろいろな写真を撮っていました。そして、彼女たちが光澤寺さんから帰るときに言ったことが印象的でした。「環境がパーフェクトである」と。つまり、上海や中国が失いつつある、失ってしまったものがここにはすべてある。何も加えてくれるな、何も変えてくれるな、ずっとこのままでいてほしいということを言っていました。

その言葉がとても印象的でした。彼女たちにとっては、そもそも星空が見えることが奇跡的な体験で、カエルの鳴き声が聞こえる、水のせせらぎが聞こえるとか、生まれて初めてと言っているような、かなり衝撃的な体験をされたようでした。でも日本は、ちょっと田舎に行けば、そういったところはまだいっぱい残っていると思います。日本人にとっては何もないということで、手を加えたがるようなものに、実はいろいろと大切なものが詰まっている。過疎地寺院も、寺院の境内地という閉じた考えではなくて、その地域を面として捉えて、地域の魅力と、その中にある寺院としての魅力というものを、どのように打ち出していかるところ、そこに可能性があるのではないかと思います。

過疎地といえども、私は未来に投資をしていくという姿勢が寺にも大切だと思っています。日本の寄付市場は成長中であるといわれていて、近年ではクラウドファンディングなどが増えてきています。クラウドファンディング自体は数十億円ぐらいの小さな市場ですが、寄付市場をもっと広く捉えるとその市場はとても大きい。特に震災を契機に、市場が広がっているといわれています。その中でも、宗教関連が寄付額のトップだといわれている。

そして、日本の金融資産は、当然、経済成長の恩恵を受けてきた高齢者に偏在している状況です。寄付者の中でも、

五十万円以上の寄付をする高額寄付者は、若年層への教育や投資に対する関心が高い。また、宗教団体への関心も、決して低くありません。寄付という行為を通じて未来に投資をして託しているわけです。お寺は長期的に継続していく存在であるので、世代間の所得移転のハブになりうるのではないかと思います。そこにお金絡むものもあれば、食や物、または知識というものも、もしかしたらあるかもしれません。近年でいえば、例えばおてらおやつクラブというものも、お寺を通じた所得移転の一つです。お寺も未来に投資をしているということを、広く関係者に伝えていくことで、共感を呼んでさらに寄付が集まってくるというような循環を作っていくことが必要ではないかと思っております。

これは当然、余力とかやる気とかいろいろなのが絡むので、そう簡単ではないと思いますが、自分のことだけしか見ていない組織に、やはりなかなか気持ちが集まらないと思います。やはり、広く社会や世の中のために行う行為を頑張ってやっている組織には、共感が生まれて、お金も集まってくるのが自然だと思います。未来に対して積極的に関わっていくことがとても大切です。

また、これはいまだに仏教界の課題であると思いますが、お寺に納めたお金、お布施が、巡り巡って何に使われているのかということが分からない。お寺にお布施を納めることがブラックボックスになってしまっているので、お寺に納められたお布施が、どういう形で社会に循環しているのかをちゃんと示していく必要があると思います。それは、会計をすべて公開するというのではなく、少なくとも、「納めていただいたお布施の何%は、こういう取り組みに使わせていただいております」とか、「あ、このお寺にお布施を納めると、そういうところに自分の気持ちが出ていくんだね」というようなことを、広くちゃんと伝えていく必要があるのではないかなと思います。遺贈というものが注目を浴びるようになってきていますし、寄付に関してはやはり方次第でかなり可能性がある分野だと思います。そして、お寺はその組織特性から見ても極めて可能性があると、私は感じております。

移住者と地域の縁つなぎという点に関しては、願望レベルでいえば、コロナ前から地方移住への関心というのが高まってきていたという点が見られます。東京の大手町に、その名もずばり「ふるさと回帰支援センター」というNPOがあり、年々問い合わせ件数が増えてきていました。コロナで一旦中断せざるをえなかったようですが、コロナ後に再開したら、やはり問い合わせ件数が増えた、という情報がホームページに載っていました。

お寺は、檀家さんだけに限らず、さまざまな思いや才能をつなぐご縁の結節点であると感じています。移住者も、お寺のご縁のネットワークの中に絡めると、定住率が高まるのではないかと感じています。やはり、地域の人間関係になじめないことが、移住を阻む、定住を阻む大きな要因の一つであるということ、よくいわれていることです。お寺は行政とは異なり、地域において中立的な立ち位置で、フラットにいるんな縁を新しい方たちに提供していくということができるわけです。そこで一度評判が立ったお寺は、移住者からすると、「まず、あそこのお寺に行っておくか」というような評判や流れもできると思います。ずっと住む方の中には、供養やお墓をお願いされる方も出てくるかもしれないので、行政とは違った形の立ち位置で、定住化に貢献をしていくことに可能性があるのではないかと思っております。

看取り・お骨の安心感。過疎地寺院でも同じだと思いますが、いま、日本社会全体で看取りの場所が変化しつつあります。病院でお亡くなりになられる方が、横ばいになってきていて、これから減っていきます。一方で、自宅や介護施設でお亡くなりになる方が増えていくことになります。病院で亡くなられたものが、これからは地域で亡くなる場所が変化するわけです。比率でいうと、もうすでに変化が出ています。

日本において、病院で亡くなる方は欧米並みの水準である、五十%前後に下がっていくといわれています。厚労行政も、病院で亡くなる比率を下げる方向に動いています。これは私の仮説ですが、いま厚労行政が大きくかじ取りを変え、病院ではなかなか亡くなるのが難しくなっている中で、自宅や施設でご縁のある方との接点を確保して、僧

侶が看取りに積極的に関わっていくことを考えています。昨年、少し炎上してしまいましたけれども、人生会議に参画していくということ、地域包括ケアシステムの一員になっていくことが求められると思います。これができるお寺は、社会から求められ続けると私は思っています。高齢者の大きな変化を見据えて、介護施設などの連携や、地域の訪問診療に関わっていくことなど、そのような動きが大切ではないかと思っております。

次に、本堂を活用し尽くしていくということです。葬儀や仏前結婚式など、人生の節目において本堂を活用していくということです。私がコロナで感じたことは、本堂ほど風通しのよい大きな空間はなかなかないため、ここは安心・安全の場所であるということをもっと積極的に発信していった方がいいのではないかなと思います。いまの住宅やいろいろな施設は、鉄筋によって超密な空間を作り上げているので、風通しはあまりよくないわけです。そのため、強引に空気の循環を起こしているということなのですが、お寺は窓を開ければ自然に風が抜けるので、お寺の安心・安全をアピールしていくことがもつとあってもいいと感じています。

そして今後は、家族のお墓が難しくなっていく中で、永代供養墓などが当然大切になってきます。永代供養墓を進めていくときに、過疎地寺院でテーマになるのが、やはり統廃合であると思います。縮小していくから統合する、というような話ではなく、発展的に統合するためにはどうするべきかという観点がとても大切だと思っています。

私を感じる違和感として、これは宗派の制度、法規も絡むので、結構難しいところはあるのですが、そもそも一宗教法人・一寺院・一住職という概念は、それぞれが異なった概念であるにもかかわらず、それがすべて一対一対応の関係として紐づいてになっているところが、仏教界の窮屈さを生んでいると思っております。いろいろな差別も絡むので肯定はしにくいのですが、戦前は本末制によって一つの大きなエコシステムで回っていたものが、戦後は解体され、一宗教法人・一寺院・一住職の関係となり、エコシステムが閉じていった。経済が伸びている時代はよかったです。現在は一つ一つのエコシステムがどんどん細まっている状況です。このままだと未来がないのでまとまりましょ

ということがない限り、恐らく存続は難しいと思います。つまり、なぜチームで運営してはいけないのかということ。このような観点にならない限り、経済原理から見たら過疎地寺院に未来はないと思います。ここでは、檀家さんの思いや、いろいろなものが絡むわけですが、それをどう乗り越えていくのか、やはり住職がリーダーシップを発揮しなくてはいけない部分が大いにあるかと思えます。

また、いまほどの寺院も似たことばかりやっています。基本的には、檀家さんを中心とした供養を行う寺院であるということですが、全部の機能がどの寺院にもあるということではなくて、寺院ごとに機能を分化させていくということがないと、なかなか難しいのではないかと思っています。この寺院は葬儀専用、この寺院は宿坊専用など。先ほど、中條先生の事例報告の中で、公民館として使用されているという発表がありました。この寺院はコミュニティスペース専用にするなど、場所によって機能をちゃんと分けていくということを、檀家さんと合意形成を取っていく。そのようなチーム運営、理想的には、財布も一つに統合できるといいと思いますが、そのような方へ変えていけない限り、個々の寺院がどこまでも頑張りましょうというあり方では限界を迎えており、難しいのではないかと思います。

発展的な統廃合の必要性は、恐らく十年前にもすでに求められていたと思います。今後、ますます余力がなくなり厳しくなってくる中で、この取り組みができないのであれば、やはり個々の寺院は役割を終えていくことになるであろうと感じております。地域社会の持続性に、どこまで寺院がチャレンジしていけるのかということ。そのため、異端であることを恐れない取り組みが大切になるだろうと感じております。

ちょうど時間になりましたので、私からのお話は、ここまでにさせていただきます。ありがとうございました。